

2本の弦に柱を立てさせ、弦を弾くことに慣れさせた。その後、4本の弦（4音）に増やし、親指だけで弾けるわらべうた『かごめかごめ』を取りあげて、すくい爪などの奏法などを体験させた。

『かごめかごめ』（部分）



「やさしく学べる箏入門」（茅原芳男 編）より

(3) 展開での工夫1・日本の音階を使って即興創作をさせる。

箏の基本的な奏法を学習した後に、日本の音階による創作活動へと展開させた。都節音階の5つの音（ミファラシド）に調弦させ、まず、二面一組で4拍間を交互に演奏する問答形式による即興創作を行い、次に4拍間をリレー式につないでいく活動を行った。



《問答形式で即興創作をする場面》

最初は、即座にどの音を使ったらよいか戸惑う姿も見られたが、慣れてくるにつれ、音階のどの音を弾いても日本的な音の流れになることを感じ取り、リズム表現などに即興性を発揮する生徒もみられた。

また、一面の即興に別の即興（五面くらいまで）を次々と重ねていく即興創作を行った。この活動では、即興による意外性ととも、音の重なりによる響きの豊かさを感じさせることができた。

(4) 展開での工夫2・『さくらさくら』を使って合奏*段物作品を創作させ、互いに聴き合う活動をさせる。

『さくらさくら』の本手（旋律）と後弾き（後奏）の学習後、本手を修飾する替手（伴奏パート）をグループごとに創作する活動を行った。1グループ5～6名で構成し、1グループに1段ずつを担当させた。1面につき2～3名にし、二面の箏を向かい合う形で置かせた。



《二面の箏を向かい合わせ創作をする場面》

*段物……箏曲の一種で、いくつかの段（部分・区切り）をもつ曲。八橋検校の『六段の調べ』が特に有名。本来は独奏曲だが、同一曲の異なる段と合奏したり、他の段物作品のある段と合奏したりすることがある。また、本手と替手による合奏作品もある。

〈創作から発表までの授業の流れ〉

① 本手と替手のパート分担

まず、グループの中で本手と替手の2つのパートに分けた。曲の途中でパートを交替することにし、交替箇所については相談させた。

② 替手担当部分の創作

創作したリズムや音は本手の奏法譜（算用数字による横譜、『かごめかごめ』の楽譜参照）にメモさせた。創作時には、アイデアが思うように浮かばず、「難しい」と感じる生徒の姿が見られたため、教師は、創作のための参考として箏曲や伝統音楽によく見られるリズムの「型」を紹介した。これにより、生徒は、「型」そのものを借用したり、「型」の展開形を考えながら創作を進めていった。授業後のアンケートで